

の経験から申し上げたまでですが、このことを親鸞聖人は、

子の母をおもいうがごとくにて

衆生仏を憶すれば

現前当来とおからず

如来を拝見うたがわず

と和讃に詠まれたのではないでしようか

A「ちよつと難しいので分かりやすく説明してください」

D「子供が悲しかったらオカアチャンと呼ぶように、悲しい心や辛い心や腹立つ心などの煩惱が起こったら、子供が母を呼ぶようにナムアマミダブツと阿弥陀仏の親の名を呼びなさい。母を慕うように阿弥陀仏の親心をおもいつつ、つねに念仏して生活していけば、遠からず阿弥陀仏が来られ、私の心の上に現れて、阿弥陀仏におあいすることが出来る。砕いて言えばそういうお心の和讃とうかがわれます」

A「では悲しい時や苦しい時だけの念仏ですか」

D「いいえそうではありません。嬉しい時もなんともない時も、どんな状況でもお念仏を申させていただくのです」

A「阿弥陀仏を拝見するとか、あうというのは、阿弥陀仏が目に見えるのですか」

D「いいえ、凡夫は阿弥陀仏を肉眼で見ることが出来ません。ここで拝見というのは聞こえと聞いて、南無阿弥陀仏と称えている念仏がそのまま、私を喚びたもう仏のお心であり仰せであると感じられることをいうのです。念仏の声で阿弥陀仏にあうのです」

A「では称えていても阿弥陀

仏の喚び声と感じられない念

仏もあるのですか

D「ええ、私が称えて、私が仏に呼びかけているというだけの念仏は、仏と私がまだ実感的にあっていないといえます」

A「じゃあそういう念仏はダメなんですね」

D「いえいえ、そういう念仏の憶とをこの和讃で、子の母を憶う念仏といわれ、その念仏は遠からず阿弥陀仏とのであらう、聖人は申されているのです」

A「しかし、念仏がなかなか申せません」

D「しぼりだしてごらんないか」

A「それは自力ではありませんか」

D「自力の念仏も、念仏にこもる弥陀の大悲強きがゆえに、ついには他力の念仏に転じて下さるのです」

A「自力の念仏ではダメで、他力でなくてはと、しぼりば聞かされますが」

D「私たちははるくらく念仏も申さない内から、自力がどうの他力がどうのとよく言いますが、自力・他力は称えた上のこと、称えない人に自力他力を言う資格はないのです」

・・・

A「人の陰口や悪口や噂を気に病んだり、私の悪口を言う人を憎んだりして悩む私は、念仏するようになったらどうなるんですか」

D「いろんな縁でお念仏を申す生活をしていきますと、念仏にわが身が照らされると、わが身のお粗末さ、我執我愛の固

まりの私、悪凡夫の私であると、だんだん自分の姿が知らされてきます。そうすると、悪口いわれて当然な私だなあ。もつともつと悪く言われても仕方がない私だなあ、思われてきます」

A「そう感じられてくると、悪口を言う人に対して、多少なりとも許していけるような感じがしますね」

D「ええ、今までの見方と少し変わってくると思います。お念仏の大悲が感じられてくると、そんなに粗末で悪い私が阿弥陀様からは決して見捨てられないばかりか、可愛そうであるとの慈悲がかけられ、ままが阿弥陀様に受け入れられていくことを感じるのです」

A「それが人間関係に何か影響があるのですか」

D「ええ大いにあるのです。私たちは何時でも自分が善人であり、正当であると思わなければ生きられないほど自己を肯定したいのです。どうしようもない我執我愛の罪悪の私が阿弥陀仏の大悲のお目当ての存在であつたと知らされるとき、私は悪人であり、愛情の乏しい人間であることを初めて素直に認め、そのよう

なみじめな自分を素直に受けとめることができるのです」

A「そうなる、人から悪く言われても、それを引き受けることができるとは、腹が立たなく悪く言われても腹が立たなくなるのですか」

D「いえいえ、どこまでも我執我愛の凡夫ですから、悪く言われて、腹が立たぬと言

のではありませぬ。腹も立ち憎む心も起さるでしよう。しかし、南無阿弥陀仏の慈悲に触れていくと、今まではただ「相手が憎い」と腹が立つ、あいつが悪い」と終わるだけだったのが、そういわれて当たりに対してゆとりが出来るようになるのです。そして自己が否定されることに耐えていけるのです。なぜなら阿弥陀様が絶対肯定して下さっているから」

A「阿弥陀様の絶対肯定といわれるところがもう少し」

D「私が自分をどこまでも善人である、頑張りが必要がなくなるのは、悪い私をこそ抱いて下さる大悲によつて、悪い私のままが有り難いという思いが与えられるのです」

A「そのほかにお念仏は、人間関係に、何か影響がありますか」

D「そうですね、憎い人やイヤな人が目の前にいても、私には憎たらしい人であり、イヤな人としか思えなくても、私を愛して下さる如来様はあの人たちも愛しておられ慈悲をそそいで下さっている、だからあの人も本当は私と同じ仏様から愛されている仏の子なんだなあ、とそういう人間観が少しずつ養われてきます」

A「そうすると私には憎い人であり恨みのある人であるとしか思えなくても、それはどこまでも私の煩惱が思っていることであつて、本当は私と同じ阿弥陀様の大事な子なのだと、そういう見方こそ

本当なんだと、うなずけてくるのですか。そうすると、こ

れまでのような自分中心、自分の都合だけで見ていた人間関係とは違つて、人との交わりも次第に和らいでくることが可能となるのですか

D「ええ、阿弥陀仏の大悲が私どもの心に深く流れるにしたがつて、次第に平和な人間関係が生まれてくると思えます。すべてはお念仏のお徳なのです」

A「有難うございました」

(了)

法味寸言

佐々木蓮磨

- 一、誰の話聞いても、よいところを取ってよるべのが念仏者。
- 一、他力のおタスケとは、こちらがタノム前におタスケの仕事がすんでいるということ。
- 一、順境は仏からはなれやすく、逆境は仏に近づきやすい。
- 一、しくじったと後悔するのは、自分の力を信じすぎた罰。
- 一、恥をかいたと悩むのは、自分の悪を知らぬ罰。
- 一、すべての悩みは、自分を守ろうとする心から起こる。
- 一、困るといふは仏から離れた証拠。
- 一、御一流は聞き直しのいらぬ法、見直しのいらぬ安心。
- 一、子供が言うことをきかぬというてコボスが、実は自分の我が侷で苦しめられているのである。
- 一、助かるとは、如来が私の主となってくたさること。
- 一、世の中に無くなるものはない、ただ変化があるのみ、「我物」とつかむから無くなる。



胡床 2 (C)SHOGAKUKAN INC.

夢告和讃に聞く

弥陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
摂取不捨の利益にて
無上覚をばさとるなり

(正像末和讃)

このご和讃は親鸞聖人が康元二年(一二五七)八十五才の時、二月九日の早朝、夢のお告げにより感得されたもので、夢告和讃ともよばれている。

「弥陀の本願信ずべし」とは誰の命令であろうか、誰の仰せであろうか。これを、親鸞聖人が私たちに仰せ下さる言葉と受け取ることもあながち間違いではない。しかし、この「弥陀の本願信ずべし」とは何と確信に満ちた言葉であろうか。人間のあらゆるおしやべりを押し返すほどの強い響きがある。それは人間親鸞の言葉というよりは、むしろ親鸞一人に届くところの仏の言葉と受け取る方が一層本来に近いと思われ。この和讃を拝読するものは、あたかも私たちの先頭に立って、親鸞聖人が弥陀仏から引き受けるのである。

私たちが全人生をゆだねても良いような、信ずるに値する言葉を一つでももっているであろうか。時の政府の言うことも、新聞記事も時流に常に流されていて、何時でも信頼できるほどのものは到底あり得ない。戦前から戦後を生きてきた人たちは身に沁みて思い知らされてきたはずである。多くの知識人たちの言論も右に左に揺れ動くばかりである。かといって身近な親の言うことは、確かに私のことを心配し、私のためを思って忠告してくれているが、親は賢者でも聖者でもない、迷える凡夫に過ぎない。私自身はどうであろうか。「私の判断」がいかにアテにならないかは、困難にぶつかるときにイヤというほど知らされてきた。確かに平生は自分の考えを杖にもし頼りにもして日々を送れるものである。しかし、いざという時には困惑し、自分の激情に振り回されたことだらうか。人は誰しも、「たよりのなさ」を痛感由ではない。

こういう世間の中に「信ずべし」と、決定的な確信をもつていえるような言葉は一つとして見出せない。それは過去も現在も同様であり、さらに未来も同様であろう。聖人のいわれるように「そらごとたわごとまことあることなき」人の世である。

今、ここで「弥陀の本願信ずべし」と、否応無いほどの権威をもって、仰せられるこの言葉。これは聖人が、自分自身の考えを固めた結論ではない。二十九才の時、比叡山を下りて法然聖人の下で初めて弥陀の本願に出逢われてから、八十五才の今まで、様々な苦難と経験の中を一筋に聖人は弥陀の本願を聞いて行かれた。

「弥陀の本願信ずべし」といわれる、それは聖人が生涯かけて、本願の真実なることを実験された上のことである。「ここにあなたの道が開けているではないか。さあともに弥陀の本願に帰順しようではないか。弥陀の本願は私たちが裏切らない」と、聖人は仰せ下さるのである。「仏のみ言葉はまことなり」、聖人は仏の言葉に無上の権威を置かれたのである。弥陀の本願を聞くことは、本来大いなる喜びをもつて聞かれるものである。まったく手放しで喜んでいいことを聞くのである。

今、この「弥陀の本願信ずべし」を繰り返して、繰り返して、私たちが聞くべきであり、聞くべきである。嬉しい時も聞くべきであり、悲しい時は更に聞くべきである。健康なときも聞くべきであり、病めるときはなお更に聞くべきである。希望のある時も聞き、失意の時はなお聞かねばならない。平生の時も聞かねばならないし、死の病いの床では一層聞きたいものである。

ひとたび弥陀の本願を信ずればもうこの言葉に用事はないのであろうか。そうではない。生涯かけて「弥陀の本願信ずべし」を聞く。本願はそのつど反復され、そのつど本願に立ち返らせていただく。未だ信じられない場合は、なお一層日々の営みの中で聞かねばならぬ言葉である。

弥陀の本願とは阿彌陀仏が私たちにかけて下さった願いである。それは私たちが願うとは違ふ。た願う。私たちがこの人生にいろいろなことを願う。将来は弁護士になりたいとか、安定した会社を勤めたいとか、高給取りになりたいとか、安定した会社を勤めたいとか、あるいはもつと真面目な願いもあるだろう。

貧しい人たちが身体に障害のある人たちを援助する
ような仕事をしたとか、医者となつて難病に悩ん
でいる人たちの助けになりたくともあるだろう。
あるいは、もっと慎ましい願いもあるだろう。家庭
生活を大事にし、健康で趣味を楽しむような生活が
したいとか家業を大事にしたいとか、私たちの願い
は実に様々である。そういうめいめいの願いはいっ
ぱい頭につまつている。

しかし、今ここで私たちは聞く、「弥陀の本願信ず
べし」と。私たちの願いにはお構いなしに「弥陀の
本願信ずべし」と仰せられる。

私たちのさまざまな願望はここでは問われていな
い。「あなたの願いは何ですか」ということも仏から
尋ねられはしない。またその必要もないのである。
私たちが一生懸命になつて自分の願いをかなえよう
としている、そういう願いを仏は「棄てよ」とも「か
なえよ」とも「かなえる」とも仰せられない。

私の願いをかなえることばかりに固執している私
たちであるが、そのような私たちに、私の願いでは
なく「私への願い」が仏からかけられているのであ
る。それは驚きであり、驚くべきことである。……

私たちの人生で驚くべきは、ただこの事である。こ
の驚くべき事に比べたら、現代科学の成果も小さな
出来事に過ぎない……

「あなたは自分の願いや欲求はいろいろあるうけ
れども、本当にあなたが心をとどめ、耳を傾け、選ば
なくてはならないことは、弥陀の願いを聞くことで
あり、弥陀の本願に心を向けることであり、弥陀の
本願を信ずることである。それがあなたにまことの
人生を決定し、実現する」と仰せられる。

私たちの個人的な願望や欲求がかなうことは喜び
であり楽しみであり、時には誇りでもある。しかし、
それらは積み上げられた積み木に似ている。少しの
揺さぶりでたちまちに崩れていくし、崩れる不安を
いつも抱えている。私たちの細工で、まことの幸せ
は成就しないことを、仏は見抜かれているのである。

阿弥陀仏の本願とは何であろうか。それは『仏説
無量寿経』の積尊の説法に明かされている。「至心信
樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺」と
いう阿弥陀仏の誓約として表されている。

弥陀の本願は、一切の衆生を一人も排除しない。
万人を、光限りなくのち限りなき覺りの境界へ生
まれさせたいとの願いを起こし、そのために一人ひ
とりのために代わつて永き修行をしたまう。永劫の

行は成就して、一切の衆生を助ける仏となりたもう。
私を助ける仏になりたもう、それが南無阿弥陀仏で
ある。その南無阿弥陀仏を私たちに与えて「十念に
至るに及ぶまで、もし生まれれば正覺を取らじ」と
喚びかけます。「たった十声なりとも念仏申せ、
きつと必ず浄土に生まれさせずばおかない。もしし
そこなつたら私自身が仏の座にはつかない」と。

さて、阿弥陀仏のおん眼に映つた私たちはどうい
う姿であろうか。それは輝かしい人間の姿でもなけ
れば、清らかで愛情に満ちた人間でもない。お互い
が信賴關係に結ばれて心と心を通いあわせている者
でもない。人生の行く末に明るさをもち、現在は充
足を味わっている人間ではない。いわんや正しい行
いになつた人間ではない。

そうではなくて、仏の御心に見られている人間は、
死につつある小さな生きもの、群あつていながら孤
独であり、愚かさ故に、欲と怒り、うぬぼれとねた
みにふりまわされ、差別と生存競争にお互いが傷つ
きあつていける者、すなわち「無明の衆生」に他なら
ない。そういう生きもの、それが私たちの赤裸々な
姿である。

弥陀の本願力は、無明の衆生に働きかけて下さる。
死にゆく生を浄らかな浄土への生と転じたまう。私
たちの悪しき人間性はやがて清浄なる仏陀たらしめ
て下さる。空しき人生は、浄土の功德を映す人生と
して意味あらしめてくださり、孤独の淋しさは、阿
弥陀仏と共なるにぎやかさに変えて下さる。更には、
人びとの幸せを願つて生きることをも可能にしたま
うのである。

次に「本願信ずるひとはみな 撰取不捨の利益に
て 無上覺をばさとのなり」とある。

弥陀の本願をかぶっていない人は誰もいない。現
代もないし、過去もない。未来もないであ
ろう。日本人もその下であり、アメリカ人もその下
にある。意識するとしないとにかかわりなく、全人
類が本願の喚びかけの下にある。

その本願に対して、それを受け入れるか、拒絶す
るか、あるいは躊躇するかのどちらかである。

弥陀の本願を信受する人は撰取不捨の利益を得て、
この上なきさとりを完成するべき身と定められる。
「無上覺をさとの身」になることを南無阿弥陀仏は
約束したもうのである。弥陀の本願を信じる人は、
このような希望に生きることが恵まれる。(了)